

よさこい祭り高知県地方チームが地域にもたらす効果と今後求められるもの

～ ソーシャル・キャピタルの考え方を参考に～

1150438 玉井 亮子

高知工科大学マネジメント学部

1 概要

本研究はよさこい祭りに参加する高知県の地方チームについて調べたものである。まずよさこい祭りにおける地方チームの参加状況などの現状を明らかにする。次に、よさこいは多くの人との交流の場になることから、社会・地域における人々の信頼関係や結びつきの重要性を表す概念であるソーシャル・キャピタルの考え方を参考に、地方チームが地域においてどのような効果をもたらしているかを考察していく。最後に今後、地方チームが持続的に存続していくために、チームにはどのようなことが求められるかを、地方チームの課題と併せて考察していく。なお本研究における地方チームとは、よさこい祭りに参加する高知県内チームの内、よさこいの中心地である高知市以外に活動拠点を置くチームのこととする。

2 背景

高知の夏といえば、やはり「よさこい祭り」であるだろう。筆者自身、大学のよさこい運営委員会に所属し、踊り子、インストラクター、企画、裏方と様々な角度・立場からよさこいに関わり、チーム運営の難しさを身をもって実感した。しかし、よさこい祭りは、それ以上の達成感や爽快感を筆者に与えてくれ、それが翌年への活力につながり、4年間よさこいに携わることができた。立場によってよさこい祭りの見え方は異なってくるが、いずれの立場からも、よさこい祭りのすばらしさ、そしてよさこい祭りは全ての人が輝ける場所であることを実感した。本祭でひとときわ目を引くのは踊り子であるが、その背景には1年をかけてチームを作り上げていくチーム関係者や、本祭を待ちわびている地域住民たちの熱い思いがある。それらがひとつになり、よさこい祭りは成立するのだろう。

しかし、高知の夏といってもよさこい祭りの盛り上がりは高知市内が中心で、本祭での受賞チームも市内チームが多い。そこで高知県の地方チームはどのような状況にあるのだろうかという疑問から、今回は地方チームに焦点を当てた。またよさこいは多くの人との出会いの場になることから、社会・地域における人々の信頼関係や結びつきの重要性を表す概念であるソーシャル・キャピタルの考え方を参考に研究を進めようと考えた。よさこい祭りの持つ素晴らしさを多くの人に知ってもらい、高知県全域でよさこいが永続的に

盛り上がってほしいと思い、このテーマを設定した。

3 目的

本研究は、よさこい祭りに参加している高知県地方チームが地域において、どのような効果をもたらしているのかを、ソーシャル・キャピタルの視点から明らかにしていく。またどのような課題があるのかを明確にし、今後地方チームに求められることを考察することを目的とする。

4 研究方法

本研究は、最初によさこい祭りとソーシャル・キャピタルに関する情報を文献やインターネットを用いて調査し、整理した。次によさこい祭りの高知県地方チームとして、よさこい祭りへの出場回数が2回の比較的新しい地方チームとして、高岡郡四万十町の「四万十町よさこい踊り子隊 四方^{しまむた}夢多」と、出場回数が36回の老舗地方チームである長岡郡本山町の「本山さくら」の2チームにインタビューとアンケート調査を実施した。同時に2チームの活動地域である四万十町と本山町の役場の方にもインタビューを行った。そしてインタビュー内容を基に、よさこい地方チームが地域においてどのような効果があるかを、ソーシャル・キャピタルの視点を基に考えていく。最後に地方チームにおける課題とそれを踏まえての今後の地方チームのあり方を検討する。

5 よさこい祭りについて

5-1 よさこい祭りの起源と広まり

現在のよさこい祭りは昭和29年、戦後不況の中で高知商工会議所が中心となり、当時の不景気を吹き飛ばし市民を元気づけようと高知市で誕生した南国土佐の風物詩である。

1992年、北海道札幌市でのYOSAKOIソーラン祭りの開催を皮切りに、よさこいは全国へと広がり、今では90か所以上のイベントやお祭りでよさこいが取り入れられている。また、ガーナやインドネシア共和国でもよさこい祭りが開催され、よさこいは世界へと広がり国際交流においても大きな役割を果たしている^[1]。よさこいの広まりとともに、よさこい祭りに参加するチームと踊り子は年々増えていっている(図5-1)^[2]。

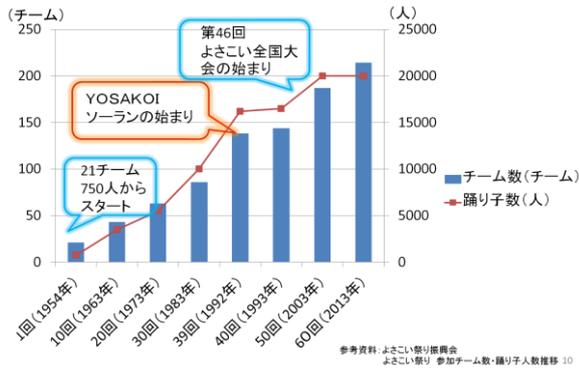


図 5-1 よさこい祭り参加の踊り子数とチーム数の推移

5-2 高知県地方チームの参加状況³⁾

昨年開催された第 61 回よさこい祭りにおいて、高知県内の地方チームの参加申し込み数は 28 チームであり、全体の 14%ほどしかなかった。そのうち、出場回数が 5 回以下のチームが 10 チーム、また 30 回以上出場しているチームは 4 チームであった。地方チームは、チームを設立するも存続が難しいのではないかということが推測できる (図 5-3)。また高知市から離れるほどチーム数が少なくなっている。地方という土地柄も、地方チームが存続することの難しさの一因に関係しているように思われる。(図 5-4)。

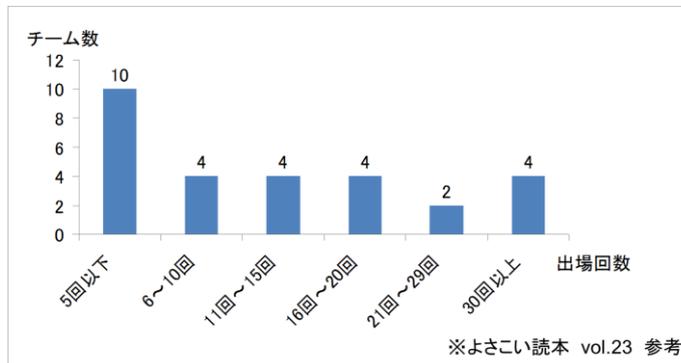


図 5-3 第 61 回大会 地方チーム出場回数比較



図 5-4 第 61 回大会 地方チーム分布

6 ソーシャル・キャピタルについて⁴⁾

ソーシャル・キャピタルとは社会・地域における人々の信頼関係や結びつきを表す概念である。ソーシャル・キャピタルの概念を広く普及させたパットナムは、ソーシャル・キャピタルを『人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴』と定義した。「信頼」「規範」「ネットワーク」は、ソーシャル・キャピタルの主な構成要素とされており、いずれかが増えると他のものも増える相互強化的であると考えられている。また「規範」については、相互依存的な利益交換である「互酬性の規範」が重視されている (図 6-1)。

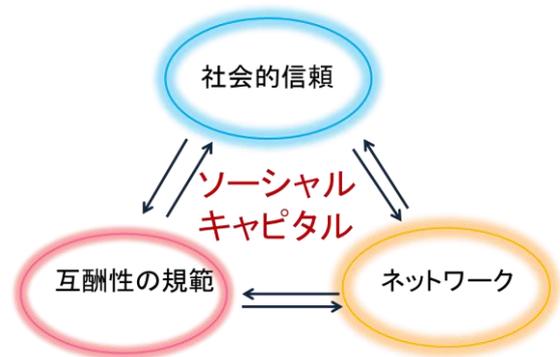


図 6-1 ソーシャル・キャピタルの概念イメージ⁴⁾

ソーシャル・キャピタルの意義については様々な議論が行われているが、ソーシャル・キャピタルが蓄積された社会では、治安・教育・健康・幸福感などにより影響があり、社会の効率性が高まるといったことが指摘されている。

またソーシャル・キャピタルのもたらす効果としては健康と幸福感の増進や、人との交流が増えることによる教育面や経済面での効果があげられている。一方強力な結合型のソーシャル・キャピタルが内向きで閉鎖的であると、排他性の危険性や、ソーシャル・キャピタルの悪用といった負の効果が生じる可能性がある。また社会的立場により、社会活動への参加には差があり、ソーシャル・キャピタルの蓄積に差が出る恐れがある。このようなことからソーシャル・キャピタルは社会のすべての人がアクセスできるようなオープンなものであることが重要とされる。

7 地方チームとソーシャル・キャピタル

本章ではまず、よさこいがソーシャル・キャピタルを創出しているのか考察した。ここでよさこいは、団体競技という「スポーツ」と、地域行事という「祭り」の 2 つの性質を持っていると考え、この 2 点から地域にソーシャル・キャピタルを創出しているのか

を考察した。その結果、両者にもソーシャル・キャピタルを構成する要素が存在しており、よさこいが新たなソーシャル・キャピタルを地域に創出していると考えられた（図7-1、7-2）。

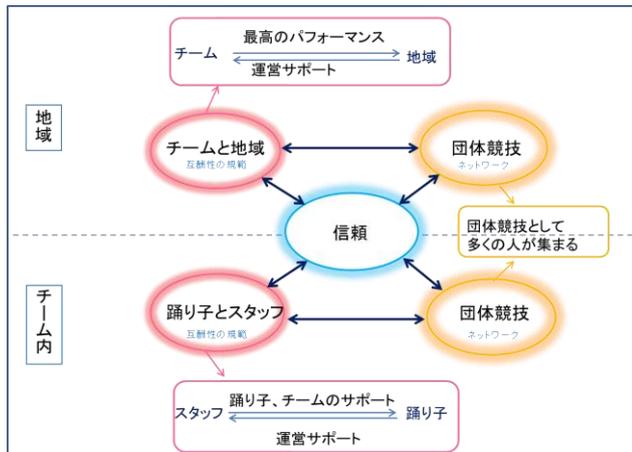


図 7-1 ソーシャル・キャピタルスポーツの視点から

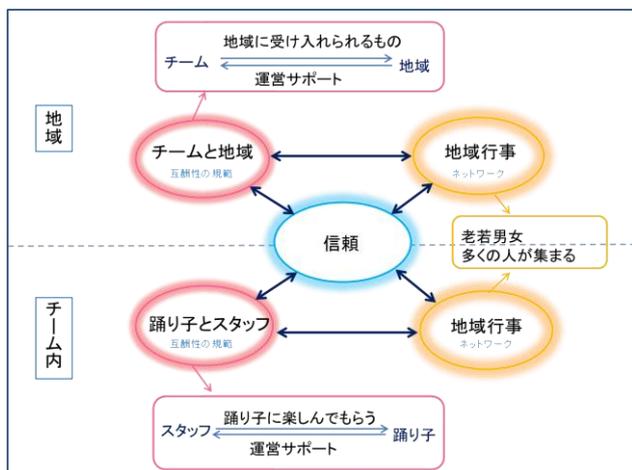


図 7-2 ソーシャル・キャピタル 祭りの視点から

地方チームによって生まれるソーシャル・キャピタルは、地域内のつながりや結束を深めると同時に、地域と地域外との新たなつながりを生むことから、結合型と橋渡し型の両方の性格を持っていると思われる。さらに地域には、よさこいを中心に地域と地域外とを結ぶ、多種多様な交流の場が生まれている。その結果、地方チームは若者の確保や、地域の自立性の創出といった効果を地域にもたらしていると考えられる（図7-4）。

これらで生まれた人と人とのつながりは、よさこい以外の面でも活かされている。よさこいを通して行政だけでなく民間主体で地域をPRすることが可能になる。四万十町よさこい踊り子隊四万夢多が活動する四万十町は、昨年の台風で甚大な被害を受けた。ここで、チーム内のつながりが、地域の被災状況の情報伝達に活かされ、迅速な災害復興に繋がったと考えられる。このように、地方チームが生み出すソーシャル・キャピタル、は地域において非常に重要な役

目を果たしていると考えられる。

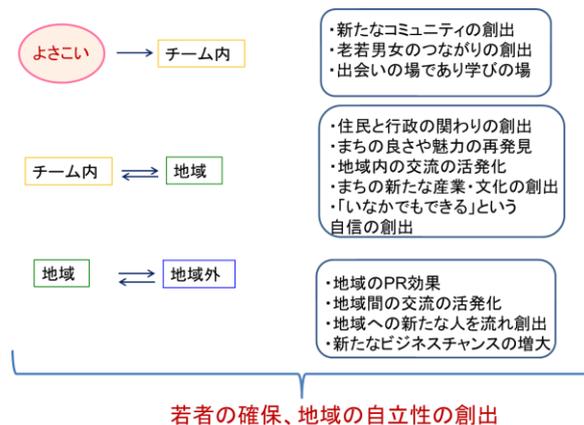


図 7-4 地方チームが地域にもたらす効果

8 地方チームの今後

インタビューやアンケート調査を通して、地方チームにはよさこいを通して地域の魅力や郷土愛を前面に出せることや、一から住民たちが作り上げていくことで、年間を通じた交流があるなど、地方チームならではの魅力があることが分かった。また、住民や行政もよさこいに地域の明るい未来を託しているようにも感じた。しかし地方チームが存続していくためには、地方チームにおける課題の解決が欠かせない。地方チームの課題として次の2点を挙げる。

第一は、やはり地方ということで人口が少ないことであり、今後も人口の減少が懸念されることである。これらは、資金面・運営面の両面において、地方チームの存続をより困難なものとする可能性がある。前者に関しては、チームに関わる人、ならびに企業が少なくなるため、運営費の工面がより困難となる。後者に関しては、踊り子や後継者の確保がより困難となる。また、人口が減少する中で活動するためには、誰でもあっても知らない顔はできず、地域の皆に納得してもらう必要がある。そういった面においても運営は難しくなるだろう。

第二に、よさこい文化が依然として身近にないことである。先にも述べたようによさこい祭りは高知市内が中心の祭りである。同じ高知県内といっても、本祭が身近にないことにより、地方ではよさこいへの関心は低くなる。人口が少ないことに加え、よさこい文化が身近に感じられない地方にとって、よさこいチームの運営、存続はさらに難しくなる。そこで2つの課題を踏まえ、地方チームに今後求められるものについて検討していく。

リピーターの確保

地方チームに限らずよさこいチームにとって、チームへの参加者の確保は必須である。地方チームにとってはリピーターの確保がさ

らに重要な意味を持つてくると考えられる。リピーターがチームにもたらす効果としては、①経験者による新規参加者の確保、②チームの活動目的の共有の浸透、③経験者増加によるチーム全体の技術の向上、が挙げられる。

そこで、まず参加者の確保に関しては、幅広い年代の人がチームに親しみやすくするため、チームの雰囲気作りから、曲や振りの構成などあらゆるところに配慮する必要があると考えられる。そのためチーム企画がより重要な役割を果たすと考える。

次に参加者からリピーターを確保するためには、上記に加え参加しやすく続けやすいチーム作りが必要になる。そのために、踊り子のみでなく裏方スタッフなどの参加方法や、多世代が参加できるような参加形態の工夫が必要だろう。また練習場所や内容の工夫、適切な参加費の設定が必要である。しかし、これらをチームの運営スタッフのみで行うことは厳しいと考える。特に参加費の設定では、参加費もチームの貴重な運営資金になるが、参加費を上げすぎると踊り子は集まらず、参加費が低すぎると運営が厳しくなる。以上の点から今後地方チームは、行政、企業、地域住民との連携を強化していく必要があると考えられる。

地域の特色を活かしたチームづくり

これは、よさこい祭りにおいて多数のチームの中でも目を引くような、地方ならではの工夫と、よさこいによる宣伝効果をうまく利用する必要があると考えるからである。そこで、地域の産業や技術を活かし、地域参加型にすることが重要であると考えられる。それはチームの個性を出すのと同時に、地方の産業や、技術を活かすことによって、地域産業の振興にもつながると考えられるからである。また、地域の伝統的な文化を工夫してよさこいに取り入れることによって、地域の文化振興や住民が地域の良さを再確認することもできる。さらに、それらがよさこい祭りにも新たな風を吹き込むことも期待できる。何より、地域の特色を活かすことで、「田舎でもできる」という自信につながり、若者の確保や、地域の自立性の創出につながる可能性がある。よさこいで地域の魅力やよさを発信することによって、地域のことをより多くの人に知ってもらうことができ、さらには、運営資金の確保も期待できると考えられる。

地方間でのよさこいの交流

先にも述べたように、地方ではよさこい文化が身近にないことが考えられる。やはりよさこいの良さは、実際によさこい祭りを体験して感じることも多い。そこで地方間でのよさこいを通じた交流が重要となってくると考える。

高知県西部では、西部でもよさこいを盛り上げようと高幡ネットワークを結成している。そこには四万十町、中土佐町、梶原町、須崎市、黒潮町、四万十市の6チームが参加しており、よさこいの

情報交換や、地域のイベントに参加しあったりしている。チームによっては行政から新たに援助を受けることができたチームもある。このように地方間での交流、さらには西部地方、東部地方、と地域を広げ交流を活性化させ、地方によさこい文化を根付かしていくことによって、住民によさこいをより身近に感じてもらう必要があると感じた。また市内チームからも参加してもらうようにすることで、より多くの人が地方チームへの関心を持ってくれるのではないかと考える。

地域に理解されるチームづくり

地方チームの一番大きな支えは地域住民であり、その方々の協力がなければチームは存続しない。チームは、明確な目的を住民と共有し、地域の名に恥じない真摯な取り組みが必要である。そして、先にも述べたように、地域の皆が親しみやすく、参加しやすいチームを作っていくことが求められ続けると考えられる。

9 まとめ

地方チームはひとつのチームを作ることにより、新たなソーシャル・キャピタルを地域に創出している。また、そこから様々な交流が生まれることによって、さらなるソーシャル・キャピタルの蓄積にも貢献している。それらにより地域には、若者の確保や地域の自立性の創出といった効果がもたらされていると考えられる。また地方チームにおける課題として人口が少ないことと、よさこい文化が身近にないことが挙げられる。そこで今後地方チームに求められることとして、リピーターの確保、地域の特色を活かしたチームづくり、地方間でのよさこいの交流、そして地域に理解されるチームづくりが挙げられると考える。

活動の根本には、運営スタッフの方々の地域に対する熱い思いと、地道な取り組みがある。その想いを地域の方や行政と共有できると、地方チームはよりよくなっていくだろう。よさこいが地域にもたらす効果は多くあるが、それらをいかに行政や住民に理解してもらうかは、地方チームを存続させていくための今後の課題にもなってくるだろう。よさこいは誰もが輝ける場所である。今後さらに多くの人がその舞台に立てるよう、高知県全域においてよさこいの発展・存続を心から願う。

10 参考文献、引用文献

- [1] 高知よさこい情報交流館 展示資料
- [2] よさこい祭り振興会作成資料、参加チーム数・踊り子人数推移、2014
- [3] よさこい祭り振興会、よさこい読本 vol.23、2014
- [4] 内閣府国民生活局、平成14年度「ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」、2003